

本の修羅観の完成ではないことを意味する。

《中国学》

『上海繁昌記』について

博士後期課程三年 川邊 雄大

『上海繁昌記』三卷（清 葛元煦撰 日本 藤堂蘇亭訓点 明治十一年1878刊）とは『滬游雜記』四卷（清 葛元照撰 光緒二年1876序刊）を編輯し訓点を施したものである（以下『繁昌記』『雜記』）。

『雜記』巻一・二では上海の名所名物を述べ、巻三では上海の詩を収録し、巻四は上海における在外公館・企業・船賃等の一覽が詳細に列挙されている。「上海旅行ガイド」ともいうべき書物である。しかしながら『繁昌記』では巻三・四が編輯し直され大幅な削除がある。また明治十一年には別に、『雜記』の和刻本も刊行されているが、巻一・二の刊行にとどまっている。

『繁昌記』は編輯の結果、上海固有の風物よりも寧ろ租界地の風物に関する記述が中心となり、そこに日本人編輯者の関心を読み取ることが出来る。つまり「ガイド」と言うよりは寧ろ異国情緒の色濃い「読み物」となったのである。

本発表では『繁昌記』の「繁昌記物」の中における位置付け、また『雜記』『繁昌記』両書を比較してその相違について述べたい。

なお『繁昌記』中には在留邦人の記述もみられるので、当時の上

海と日本の関係も同時にみていきたい。

貝原益軒『大疑録』に於ける宋儒批判

博士後期課程三年 岡野 康幸

貝原益軒（一六三〇年～一七一四年）最晩年の著作『大疑録』には益軒自身「篤信（益軒の名）十四五歳自ら聖学に志有り。夙に宋儒の書を読みて其の説に敦くし、之れを宗師とすること尚し。復た嘗て大いに疑ふ所有り。……思ひを覃むること三十余年と雖も、然れども独り惑ひを抱き未だ啓明する能はず。以て終身の慊と為す。此に於いて姑く疑惑する所を記し、以て識者の開示を望むのみ。……」（『大疑録序』）と記すように宋儒に対する大疑を提示したものである。

益軒の宋学に対する大疑を一言で表現すれば、分析しすぎるといふ点である。大疑という表現を借りて実質宋儒の批判を展開する。そこで益軒が挙げているものは「無極・大極」「理氣二物」「天地之性・氣質之性」といった宋学の主要概念である。そして益軒は分析的な見方ではなく、渾融的な見方・捉え方が本来の儒教であると『大疑録』にて示す。

本発表では貝原益軒が大疑という表現で明示した批判がどのような性質であるのか。また益軒と宋儒（特に朱熹）との相違点を明らかにする。